

2020 年 1 月 1 日（水）「山か、宮か」

詩篇 11:1-7

0 指揮者のために。ダビデによる

1 主に私は身を避ける。どうして、あなたたちは私のたましいに言うのか。「鳥のように、おまえたちの山に飛んで行け。2 それ、見よ。悪者どもが弓を張り、弦に矢をつがえ、暗やみで心の直ぐな人を射ぬこうとしている。3 投げ所がこわされたら正しい者に何ができようか。」

4 主は、その聖座が宮にあり、主は、その王座が天にある。その目は見通し、そのまぶたは、人の子らを調べる。5 主は正しい者と悪者を調べる。そのみこころは、暴虐を好む者を憎む。

6 主は、悪者の上に網を張る。火と硫黄。燃える風が彼らの杯への分け前となろう。7 主は正しく、正義を愛される。直ぐな人は、御顔を仰ぎ見る。

【序論】

2020 年、あけましておめでとうございます。年の初めの日に主の民が一堂に会せることに力強さを覚えております。この年、個人としても共同体としても、主なる神様にまことの信頼を置いて歩み抜くことができますように。御言葉に人生の基礎を据え、右にも曲がらず左にも逸れず、進んでまいりましょう。

【本論】

詩篇 11 篇は、詩人が何らか危機的な状況にあったとき、友人から一つの助言を受けたという背景をもちます。タイトルは「**ダビデによる**」と書かれていますが、これが実際にダビデの作品なのか、あるいは後代の詩にダビデの名前が付けられたのか、定かではありません。もちろん、ダビデが初代イスラエルの王サウルに仕えていた頃、王に妬まれ、執拗に命を狙われていた状況に照らして読むと、リアリティが溢れてくるでしょう。今日はダビデを含め迫害を受けた様々な信仰者の状況、その中でもとりわけネヘミヤの経験に照らして読んでみたいと思います。

本論 1. 不信仰な助言者

主に私は身を避ける。どうして、あなたたちは私のたましいに言うのか。「鳥のように、おまえたちの山に飛んで行け。（11:1）

「鳥のように、おまえたちの山に飛んで行け」（「山へ逃れよ」新共同訳）という助言を、詩人の友人が伝えてきたようです。おそらく、詩人は何らかの苦しい経験の只中にあり、命の危機に晒されていたのでしょう。敵に取り囲まれ、いつ捕えられて^{なぶ}罾り者にされるかも知れない。そういう状況を見かねて、親しい友人は助言したのです。誰にも見つからない山へ難を逃れよと。^{もっ}尤もな助言です。敢えて危険な状況下に踏み留まる必要はないと考えるのが人間の普通の思考でしょう。これはまさしく善意から出た進言であり、詩人の命を案じてのことでした。

ところが、詩人は思いがけない返答をするのです。「主に私は身を避ける。どうして、あなたたちは私のたましいに言うのか」と。主に頼っている私の魂を何故に挫こうとするのか。このような危険な状況下にあっても、神はいつでも私と共におられ、守ってくださっているではないか。今までもその守りを見てきたし、これからも主は変わらないだろう。そのことを信じて歩んでいるというのに、なぜ逃げることを勧めるのか。

このやりとりは微妙です。信仰者といえども現実に生きているのであり、敢えて危ない橋を渡るべきではないこともあるでしょう。問題に直面している人自身が判断しなければならぬのであって、右へ行くも左へ行くも、その責任を取らなくてはなりません。友人の言うことにも一理あるのです。後になって「ほら、あのとき俺が言ったとおりに行動していれば、こんなことにはならなかったんだ」と言われるような結果に至るかもしれない。先のことは分からないのであって、信仰者はどちらが本当の神の声なのかを見極めるのに苦労することが少なくないでしょう。

しかし、2節、3節に続く友人の助言を注意深く読むならば、その言葉には不信仰の臭気が漂っているのです。

それ、見よ。悪者どもが弓を張り、弦に矢をつがえ、暗やみで心の直ぐな人を射ぬこうと
している。投げ所がこわされたら正しい者に何ができようか。」（11:2-3）

特に3節。「投げ所が壊される」とは、秩序が崩壊すること、国家も社会的基盤もすべてが歪み、正義と公正が行なわれていない現実を指すでしょう。ダビデの場合、王がまったく理不尽な動機から部下の命を付け狙う。それに組みする者が大勢いる。権力におもねり、罪なき者の血を流す者がいる。そういう現実を見て、正義は悪に吞まれてしまったと諦めた人がいたのです。ここに留まっても損するだけだ。世の責任など放り出して、山へ逃げよと。「山」とは実際の山を指すのかもしれませんが、人間が「投げ所」とする神以外のあらゆるものを象徴しているでしょう。私たちが最も神と置き換えやすい「この世のもの」とは何でしょうか。金銭か、名誉か。あるいは、人の声が神の声に置き換えられていることはないだろうか。

本論 2. 人の声が耳に入ってくる事例

人が善意によって助言を与えてくれるにも拘らず、それが必ずしも神への信頼から出していない事例が聖書の様々な箇所に出てきます。いくつかご紹介しましょう。

アブラハムの妻サラは、神からの約束の子どもがいつまで経っても与えられないので、女奴隷ハガルによって子をもうけるよう夫に進言しました。このことは、相続者を得るための一般的な手段でしたが、信仰から出た判断ではありませんでした(創世記 16 章)。

捕囚からの帰還後、神殿の再建に反対する者たちが、この事業を進めているネヘミヤの命を狙っていました。シェマヤという友人がネヘミヤに「本堂の中にこもって隠れていなさい」と助言しましたが、ネヘミヤは彼の言葉に隠された偽りを見抜きました。ネヘミヤは身分的に本堂に入ることができませんでしたから、もしこの^{もっと}尤もらしい進言に聞き従っていたら、反対に殺される理由ができてしまったはずでした。彼は神の定めに従い、難を逃れました(ネヘミヤ 6:10-13)。

ペテロは主イエスがご自分の受難を予告されたとき、それをとんでもないこととして諫めました。メシヤが殺されるなどあり得ないことだと。しかし、主イエスは彼の善意から出た言葉の内に潜むサタンの策略を見抜き、その声を退けました(マタイ 16:22-23)。

複数のパリサイ人が主イエスに、ヘロデが暗殺を企んでいるから逃げろという進言をしてきたこともあります。しかし、主イエスはご自分の死に場所がエルサレムであることを知っておられたので、そのような脅しに屈して働きから逃げるようなことを決してなさいませんでした(ルカ 13:31-35)。

パウロがエルサレムへ上ろうとしているとき、預言者アガボがエルサレムにおけるパウロの運命(捕えられること)を告げましたが、そのことを案じて、行くのを止めようとした人々がいました。パウロは彼らの親切な助言を斥け、自分は苦しめられても主の福音を宣べ伝えなくてはならない使命を帯びていると説き伏せました(使徒 21:10-14)。

幾つかの事例をご紹介しましたが、人の助言というのは、それがどんなに叡智に富み、信頼の置ける相手であったとしても、神の御心と一致しているとは言い切れない面があるのです。私もある時期、自分の進路について、周りの多くの人がいろんな助言を与えてきた経験があります。自分が質問をしたわけではないけれど、周りの人々が心配をして、自分の考えをあれこれ伝えてくる。その助言の数があまりに多かったので、私は混乱しました。そして、最終的に行き着いたのは、ただ神の声に聞き従うということでした。人ではない、神は自分に何を求めておられるのか。その道を見つけ出したならば、誰にどう思われようと迷うことはありません。❷

本論 3. 神の宮での祈り

PP

主は、その聖座が宮にあり、主は、その王座が天にある。その目は見通し、そのまぶたは、人の子らを調べる。主は正しい者と悪者を調べる。(11:4-5a)

詩人は「山」ではなく「宮」に目を向けます。「宮」とは、必ずしも実際の神殿のことではなく、神が臨在される「天の御座」と捉えてよいでしょう。つまり、詩人は命の危機が迫っていたとしても、そこから逃げるのではなく、「私はここで神に祈る」と宣言しているのです。❸これが信仰者の特権であり、場所を変えずとも、どこにあっても祈りの中に入っていくことできる。ネヘミヤ書には、随所で彼の祈りの文言が登場します。

- ・ 私はこのことばを聞いたとき、すわって泣き、数日の間、喪に服し、断食して天の神の前に祈って、(1:4)
- ・ すると、王は私に言った。「では、あなたは何を願うのか。」そこで私は、天の神に祈ってから、(2:4)
- ・ 私の神。どうか私がこの民のためにしたすべてのことを覚えて、私をいつくしんでください。(5:19)
- ・ 事実、これらのことはみな、「あの者たちが氣力を失って工事をやめ、中止するだろう」と考えて、私たちをおどすためであった。ああ、今、私を力づけてください。(6:9)
- ・ わが神よ。トビヤやサヌバラテのあのしわざと、また、私を恐れさせようとした女預言者ノアデヤや、その他の預言者たちのしわざを忘れないでください。(6:14)
- ・ 私の神。どうか、このことのために私を覚えていてください。私の神の宮と、その務めのためにしたいろいろな私の愛のわざを、ぬぐい去らないでください。(13:14)
- ・ 私はレビ人に命じて、身をきよめさせ、安息日をきよく保つために、門の守りにつかせた。私の神。どうか、このことにおいてもまた、私を覚えていてください。そして、あなたの大きないつくしみによって私をあわれんでください。(13:22)
- ・ 私の神。どうか彼らのことを思い出してください。彼らは祭司職を汚し、祭司やレビ人たちの契約を汚したからです。(13:29)
- ・ 定まった時に行うたきぎのささげ物と、初物についての規程も定めた。私の神。どうか私を覚えて、いつくしんでください。(13:31)

このように、ネヘミヤ書は捕囚後の神殿再建物語でありながら、著者ネヘミヤの祈りが随所に出てきます。著者の信仰と苦悩が現れている。彼が「祈りの人」であり、どんなときにも祈って神の御心を求めていることが分かるでしょう。パウロが言う「絶えず祈りなさい」(Iテサロニケ 5:17) という生き方そのものであります。

本論 4. 神の審きへの信頼

PP

そのみこころは、暴虐を好む者を憎む。主は、悪者の上に網を張る。火と硫黄。燃える風が彼らの杯への分け前となろう。主は正しく、正義を愛される。直ぐな人は、御顔を仰ぎ見る。(11:5b-7)

詩人は何故に神を信頼していたか。それは、神が正義を愛し、悪を憎まれる方であるから。そして、すべてのことを見通し、正しい審判をなさる方だからです。4節でも「調べる」という言葉が出てきました。これは金の精錬に用いられる言葉で、一つひとつの物事を注視するという意味をもちます。神は人間には白黒つけられない事柄もしっかりと識別し、善悪を区別なさるのです。人間世界には多くのグレイゾーンがあり、あちら立てればこちらが立たぬ、双方に言い分がある…そういう状況が多く存在するでしょう。そして、すべての真実が明らかにされないまま判断が下されてしまうことや、片方だけの意見が聞かれて不公平なジャッジがなされることが多い。しかし、神はそうではない。すべての物事を徹に入り細にわたって調べ、人間の隠れた動機までも見抜き、万事を公正に裁くことがおできになる。その裁きを見るのは最後の審判の日かもしれませんが、私たちは自分自身が歩んだ人生も含めて、全世界、全歴史のすべてが明らかにされることを信じているのです。

このような全知全能の神に祈ることのできる幸い、真^{しん}に寄り頼むべき場所があるという幸いを噛みしめるものであります。

【結論】

2020 年も多くの戦いがあるでしょう。そして、まっすぐ神の道を歩んでいこうとするとき、必ず脇道へと誘い込もうとする声がかかるはずです。そのたびに、まず神に祈ることを忘れないようにしたい。そして、慌てて答えを出すのではなく、じっくりと御言葉と向き合い、主イエスが求めておられる道——それは必ずしも楽な道ではないかもしれませんが——を選び取っていきたいと思います。対症療法的に御言葉の一箇所を引用して判断するのではなく、聖書全体を通じて神の御旨を広く捉え、その中に自分の人生を位置づけ、今ある状況を天の御座から神と共に見るという視点をもっていきたいと思います。「山ではなく、宮へ行く」。それは祈りの中です。私たちはネヘミヤのように、どんなときでも神の御座に入っていくことができるのですから。

【祈り】

人に自由意志をお与えになった神よ。私たちのこの短い人生には、判断が求められる状況が多く訪れます。その判断の一つひとつはあなたによって委ねられていますが、私たちがあなたの最善を知るようになるためには祈りが欠かせません。人は善意からいろんなことを語ります。しかし、最終的には神と自分との間で決めなくてはなりません。聖書全体から主が求めておられることが何であるかを見極める力をお与えください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、

人に自由な意志をもって歩むべき道を選択させ給う、父なる神の愛、
如何なるときにも祈ることを教え、神の最善の道を示し給う、主イエス・キリストの恵み、

聖書全体を通じて神の御旨を教え、俯瞰的に現在の状況を見極めさせ給う、聖霊の親しき交わりが、

我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。